

エル・ライブラリー所蔵の近江絹糸人権争議 資料：辻コレクションについて

NAGUMO, Chiaki / 島西, 智輝 / 梅崎, 修 / 下久保, 恵子 /
谷合, 佳代子 / 南雲, 智映 / SHIMOKUBO, Keiko /
SHIMANISHI, Tomoki / UMEZAKI, Osamu / TANIAI, Kayoko

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / The Journal of Ohara Institute for Social
Research

(巻 / Volume)

668

(開始ページ / Start Page)

63

(終了ページ / End Page)

74

(発行年 / Year)

2014-06-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010251>

エル・ライブラリー所蔵の 近江絹糸人権争議資料

—辻コレクションについて

島西智輝・梅崎修・下久保恵子・谷合佳代子・南雲智映

はじめに

- 1 労働史研究における近江絹糸関連資料の価値
- 2 「辻コレクション」の概要
- 3 資料の解説

おわりに

はじめに

本稿は、1998年に大阪社会運動協会（社運協）に寄贈された労働史資料（辻コレクション）を整理・紹介し、その労働史研究における価値を検討する。

まず、資料を寄贈した故・辻保治氏（1935～98年）（以下、辻氏）の略歴を紹介しておこう。辻氏は、1953年に近江絹糸に入社後、同社彦根工場において深夜業に従事し、人権争議で中心的な役割を果たした。争議終結後は、労組彦根支部教宣部で「らくがき運動」を職場新聞に発展させると同時に職場闘争委員会を組織し、各職場に労働運動を根付かせる独自の運動スタイルを実現させた。一方で、サークル活動家としても活躍し、詩サークル『噴煙』を結成するなど、近江絹糸労働者の創作活動に大きな影響を与えた。辻氏は自ら彦根の地域文芸サークル誌『熔岩』にも参加した。1957～58年に近江絹糸労組の分裂騒動が起こった際には、反主流派である大垣方針派の立場をとった⁽¹⁾。1962年、辻氏は近江絹糸を退職したが、その後も労働詩、労働運動にかかわり、晩年は地名研究に情熱を注いだ。

なお、辻氏の著作としては、「近江絹糸ストライキに参加して—〈メモ〉工員ツジの場合」（『大阪労働運動史研究』（15），pp.10-18）⁽²⁾がある。同号には入江スナエ氏の口述記録と質疑応答（辻氏も参加）を取めた「近江絹糸の思い出」（『大阪労働運動史研究』（15），pp.20-32）も掲載されている。また、辻氏の妻である朝子氏がまとめた辻氏の遺稿集『地を這う』（1998）には、病床

(1) 分裂騒動は、大銀行の協力を得て再建を目指す主流派と、銀行独占資本の支配を排して創業者一族である夏川家主導の再建を目指す反主流派の対立から起きた（上野輝将『近江絹糸人権争議の研究—戦後民主主義と社会運動』（部落問題研究所，2009，pp.243-246）。

(2) 同文は同タイトルで小冊子にまとめられ、1985年に私家版として工房ムーゼンから発行された。

での詩や佐渡在住の民俗学・地名研究者である本間雅彦氏⁽³⁾に宛てた手紙、箕面市史学会会報に載せた地名に関する論考が収められている。

近江絹糸人権争議は、1950年代の日本を代表する労働争議であり、労働組合の結成からはじまり、長期ストによる勝利を得ている。しかし、近江絹糸人権争議は記憶に残る華々しい争議であったが、資料も整備されておらず、先行研究も少ない。本稿が、この新しい歴史資料を整理・紹介したゆえんである。

辻朝子氏によれば、辻コレクションが社運協に収蔵された経緯は、以下の通りである。辻氏の居住地域であった北摂に労組員たちの集まり・学習会が組織されており、辻氏は学習会の講師として招請されていた。その際、辻氏は会のメンバーのひとり、全国金属労働組合大阪地方本部の北方龍二氏と知り合った。辻氏の死後、北方氏が「辻さんの資料を社運協に寄贈したら」と遺族にアドバイスし、北方氏が関わっていた社運協に資料が寄贈されることとなった。

資料公開のきっかけは、2011年から開始された近江絹糸人権争議のオーラルヒストリー・プロジェクトである⁽⁴⁾。このプロジェクトの一環として、既に社運協に保存されていた辻コレクションの公開を企画している。5名の執筆者のうち、関西在住の2名（下久保，谷合）が辻コレクションの目録化と資料紹介の記述をまとめ、残り3名（梅崎，島西，南雲）がオーラルヒストリーと先行研究を参照しながら労働史における本資料の意義を検討した。

本稿の構成は以下の通りである。続く第1節では、研究史における辻コレクションの価値について検討する。第2節では、辻コレクションの概要を説明する。第3節では、資料の内容を紹介する。最後は、まとめである。

1 労働史研究における近江絹糸関連資料の価値

本節では、はじめに近江絹糸人権争議の研究を紹介し、今後実証研究を行うためにどのような資料が必要かを検討する。

一次史料を使った数少ない近江絹糸人権争議の実証研究として、上野輝将『近江絹糸人権争議の研究—戦後民主主義と社会運動』（部落問題研究所，2009）があげられる。上野（2009）の研究上の貢献として、第一にその詳細な実証的な記述をあげることができるが、第二に、その分析が多面的に行われていることがあげられる。その章立てを読めばわかるように、争議そのものの経緯に留まらず、争議以前の経営も分析され、加えて公的機関、財界、金融機関との関連性が考察されている。さらに、争議とマスコミの関係や、教育制度、文化集団、宗教といった文化史・社会史の視角からの分析がなされている。これらの多面的な分析の結果、上野（2009）は、近江絹糸人権争議には戦後10年を経た日本社会の様々な社会関係が投影されていたとし、「戦前から引きずってきた遅れた社会関係や社会意識と、戦後の民主化運動や民主主義教育などを通じて新しく形成された社会関係・社会意識が労働者大衆の中にも、一人の労働者個人の中にも併存していることを示した。

(3) 本間雅彦『縄文の地名を探る』（高志書院，2000）などの著作がある。

(4) オーラルヒストリーの記録は、『近江絹糸人権争議オーラルヒストリー（1）』（科研費報告書，2013）、『近江絹糸人権争議オーラルヒストリー（2）中村幸男オーラルヒストリー』（同上，2013）としてまとめられている。

そして人権争議は後者の社会傾向に力を得て勝利し、またその勝利は時代の前進を促進した。(369頁)」という結論を述べている。

辻コレクションの一つの特徴は、このような文化集団の活動を分析できる情報を提供していることである。もちろん上野（2009）でも、第3部第4章「人権争議と文化集団」にて文化集団の活動が分析されているが、当時の多くの文化集団の多様な活動を考えると、取り上げられた文化活動は少ないといえよう。

近年、このような文化集団の研究は文学研究や思想史研究の中で再評価され、発展しつつある⁽⁵⁾。たとえば、『現代思想（総特集 戦後民衆精神史）』（35（17）、青土社、2007）では、労働者による文化活動・サークル活動が多面的に研究されている。同書で道場親信氏は、東京南部における文化集団・サークル活動の歴史を検討し、特に工作者の活動と思想を明らかにしている⁽⁶⁾。しかし、文化集団に関する資料はまだ少なく、文化集団・サークル活動の産業別、地域別、時期区分別の違いを分析するためにも、これまで未発掘であった辻コレクションを整理・公開することの意義は大きいといえよう。

辻コレクションのもう一つの特徴は、文化集団やサークルだけでなく組合活動の資料も多い点である。ただし、人権争議時点の資料ではなく、争議終了後の資料が中心である。

人権争議後、近江絹糸では、組合分裂が起こっており、その分析には分裂を生み出した組合員間における意見の違いを検討する必要がある。上野（2009）を書評した榎一江「書評と紹介 上野輝将著『近江絹糸人権争議の研究—戦後民主主義と社会運動』」（『大原社会問題研究所雑誌』609, pp.57-59）は、争議終了後の組合内での意見の対立については、他の分析と比べても記述が禁欲的であると指摘している⁽⁷⁾。

すなわち、人権争議後の対立や分裂は今後の研究課題とされているのであるが、辻コレクションにはその情報が含まれている。さらに、この対立や分裂は、上述した文化集団・サークル活動とも関連する。文化運動などの活動とつながりながら職場から湧き上がってきた「新しい社会意識」を把握することで、対立や分裂を生み出した要因を考察することも必要だと考えられるからである。

2 「辻コレクション」の概要

本節では、辻コレクション（以下、コレクション）の概要を説明する。まず、資料の作成・発行年代は、大部分が1953年から9年間、辻氏が近江絹糸に在籍していた時期のものであるが、その

(5) 文化集団に対する先駆的研究として思想の科学研究会編『共同研究 集団—サークルの戦後思想史』（平凡社、1976）があげられる。文化集団の研究では、労働者が生み出した文化集団以外の多様な文化集団の活動が取りあげられている。この研究の延長線上に、天野正子『「つきあい」の戦後史—サークル・ネットワークの拓く地平』（吉川弘文館、2005）がある。

(6) 道場親信「工作者・江島寛」『現代思想（総特集 戦後民衆精神史）』（35（17）、青土社 2007, pp.162-175）；同「下丸子文化集団とその時代—一五〇年代東京南部サークル運動研究序説」『現代思想（総特集 戦後民衆精神史）』（35（17）、青土社 2007, pp.38-101）。

(7) 上野の著作への書評は他に、田中はるみ「上野輝将『近江絹糸人権争議の研究—戦後民主主義と社会運動』（部落問題研究所、二〇〇九年）から学ぶ」『歴史科学』201号、2010.5）などがある。

後、大阪で詩人として活動した時期の資料も含まれる。最も新しいものは1970年代のものである。

コレクションは16mmフィルム2本と、段ボール箱(38×52×26cm)2箱分の文献資料から成り、総点数は547点⁽⁸⁾に及ぶ。本節では、このうち文献資料に限って述べる⁽⁹⁾。

まず、コレクションは作成者・発行者別に、大きく4つの資料群に分けられる。(A)近江絹糸紡績株式会社が発行したもの18点、(B)近江絹糸労働組合が発行したもの336点、(C)労働組合・地域サークルなど近江絹糸以外の主体が発行したもの93点、(D)草稿・メモなど辻氏個人の創作関係資料100点である。資料目録では、この4分類にしたがって採録した。

個人資料以外の資料群に共通する特徴は、機関紙、文集などミニ・コミ的な小冊子資料が多いことである。中でも、近江絹糸労働組合関係のものは労組本部、支部別、職場別⁽¹⁰⁾と各組織が発行したものがあ、内容も職場新聞、サークル誌、文芸誌など多岐にわたる。

本稿では、表1に示した規則に沿って目録採取を行った。目録順序は、前節で示した(A)～(D)の各資料群別に配列し、固有の資料番号をとった。なおそのうち、(B)近江絹糸労働組合発

表1 目録採取規則

項目	説明
資料番号	資料1点ずつに付した固有の番号。アルファベットはA=会社の発行物、B=近江絹糸労組発行物、C=その他、D=辻保治個人作成、を表す。資料解説のタイトル等の後ろに【B143】というように付記した。
資料種別	表紙があるものは逐次刊行物を「雑誌」とし、他は「図書」とした。表紙のないものは「新聞」または「文書」とした。
タイトル	表紙→裏表紙→奥付の優先順で採取し、これらの情報源に別表現がある場合は、注記3へ記載した。
雑誌各号の特集タイトル 各号の副題	注記3へ記載した。
責任表示	責任表示の範囲は、著者、編者、編纂者、編集者、編集人を含む。職場新聞については題字欄から、図書・雑誌については表紙→裏表紙→奥付の優先順で採取し、これらの情報源に別表現がある場合は、注記3へ記載した。
発行人	奥付発行者が個人名のときのみ入力した。
出版者	表紙→裏表紙→奥付の優先順で採取し、これらの情報源に別表現がある場合は、注記3へ記載した。奥付の発行者(個人名を除く)を含む。
ページ数	本紙に記載があるものだけ採取した。
大きさ	1cm未満は切り上げて記載した。

資料：筆者(谷合、下久保)作成。

(8) 資料点数は、図書や小冊子など綴じや折りのあるものはその綴じられたものを物理単位として1点と数えた。新聞はタイトル単位ではなく一部ずつを1点、雑誌も同じくタイトル単位ではなく物理単位の1冊を1点と数えた。文書記録やピラなどは分離できる最小物理単位を1点とする場合と、1束を1点とする場合や封筒に入った1袋を1点と数えた場合がある。したがって、数え方によっては、ここに掲げた資料点数から増減する可能性がある。

(9) フィルムのうち1本は全織同盟が製作した「立ちあがる女子労働者」であるが、もう1本はタイトル未確認である。

(10) ここでいう「職場」とは、工場の生産工程単位である。後述する「らくがき運動」から「職場新聞」、「職場闘争」への発展の際の基本的な運動単位となった。

行物については可能な限り、注記1で資料の内容を、注記2で資料を発行した組合支部を示すこととした。注記3には表1の規則に示した書誌事項のほか、特記事項を記載した。

なお、コレクションはいずれも作成から60年近くを経た資料であり、手書きでガリ版刷り（謄写版印刷）されたものがほとんどのため、紙の酸化による劣化が激しい。脱酸素処理などを施す必要のある資料ばかりであり、資料の修復と保全是今後の大きな課題である。

3 資料の解説

3-1 文化運動から職場闘争へ

(1) 「らくがき」運動

争議終結後、辻氏が労組彦根支部教文部の中心的な存在として活動していたこともあり、コレクションの中には、会議記録など準私的なノートも含め、教文部が取り組んでいた「らくがき運動」や「職場新聞」発行関係の資料が多数収められている⁽¹¹⁾。

コレクションには、「らくがき」が運動として取り上げられていく過程を記した資料が残されている。『第一回教文部長会議のまとめ』（1955年）【B341】は、直接の契機が組合結成一周年記念文集の出版計画であったことを教えてくれる。また、教文部内での議論も記されている。文集出版が、自らの心情を吐露する「書く運動」へと変化していく過程は、『第一回編集委員会のまとめ』（1955年）【B342】に記されている。同資料では、らくがき帳の回覧やアンケートの実施など運動の推進方法にかんする検討もなされている。

『第二回編集委員会のまとめ』（1955年）【B343】、『「らくがき帳運動」について：その経過と成果および今後の問題：組織の強化と教宣活動の前進のために』（1956年）【B353】、および『近絹教宣内報』No.1（1956年）【B269】などは、労組各支部で取り組まれた「らくがき」運動の実態を明らかにする資料である。中傷、落書き帳の破壊などの問題を経て、らくがき帳が相互批判に耐える媒体へと変化していったことがわかる。また、これらの資料は、性の問題や、婦人病・生理衛生など、女性組合員を多数抱える労組ならではの記述も含まれている点が注目される。

こうした運動の結果得られた「らくがき」や作品をまとめた記念文集が、『らくがき』（1956年）【B102】である。同資料によると、運動の成果はらくがき帳438冊、投稿作品508篇、アンケート800人分にのぼったという。全224頁にのぼる同資料には、生活記録、独り言めいたもの、まんがを描きなぐったようなもの、工場の壁の落書写真、詩、肉筆の寄せ書き、カットなどが収められている。その内容も、仕事の辛さ、職場への不満、家族への思い、恋愛や日常の暮らしなど様々な内容が盛り込まれ、職制や組合幹部への批判も割愛されることなく掲載されている点が興味深い。

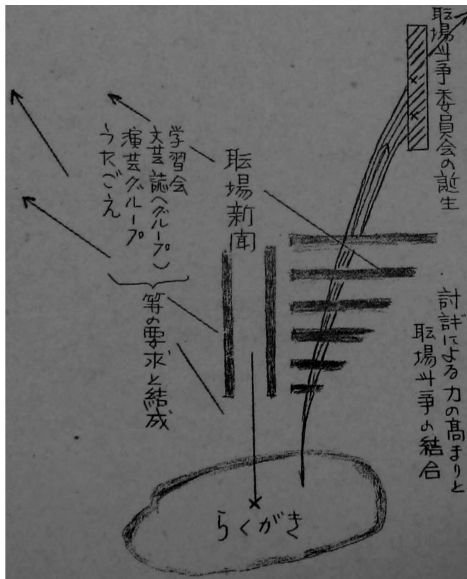
(2) 「らくがき」と職場新聞・職場闘争

辻氏の執筆によるものと思われる⁽¹²⁾『ラクガキ運動のために』（ラクガキ班編集、彦根支部教文

(11) 「らくがき運動」のおこりについては『らくがき運動：資料』【B349】に、『新日本通信関西版』の“「らくがき運動」の特集”からの引用として「大阪市外電話局のツール（米軍専用線）の職場で始められていた」とある。なお、コレクションには「らくがき」「ラクガキ」「落書」など様々な表記が見られるが、本稿では「らくがき」の表記に統一する。

部発行、1956年)【B280】は、「らくがき」を労働運動にどのように反映させていくかという視点で書かれており、他の教文部の資料と比べて運動論的な色彩が濃い。辻氏がこの過程を図示した図1によれば、らくがきから職場新聞へと発展する矢印は、職場闘争委員会と文芸誌・うたごえ等サークルの要求・結成へと二方向へ分岐している。労働者の声を労働運動に組織すると同時に表現活動・文化活動へと発展させようとする辻氏の問題意識を示している重要な資料である。

図1 らくがき運動の発展方向
(辻氏による概念図)



資料：ラクガキ班『ラクガキ運動のために』
【B280】、p.14を撮影。

同資料は、運動の具体的な方策について、「収集の方法について」「アピールについて」「新しい組織の誕生」「『声』の大衆討議」「職場闘争との結合」「再びアピールについて」の順に記している。同資料は、アピールの方法として、職場新聞、パンフレット、読み上げなどをあげているが、彦根支部では運動をはじめた全職場で職場新聞によるアピールの方法が採用されたという。そして、製綿職場を事例として、職場単位で組織を作り、「らくがき」から要求をすくい出し、職場の討論の中からその要求を深め、さらに職場新聞や文化活動を利用した「アピール」によって、それを組合支部で全体化していく過程の記録が収められている。

職場新聞については後述することにして、ここでは文化活動を利用した「アピール」にかんする資料を紹介したい。構成詩『団結のために』【B133】⁽¹³⁾が、それである。そのなかの作品のひとつである詩「仲間達よ」は、「今日もみた／鼻をつまんでとおる仲間を／さなぎ粉と／ほこりをかぶって働いている私のそばを／くさいと言うしぐさをしてゆく／…(後略)」と、職場の実態を切々と訴えている。

(3) 職場新聞の実態

職場新聞の発行状況を一覧できる資料としては、『職場新聞代表者会議のまとめ』(1957年)【B351】がある。また、彦根支部については、年代不明ながら、ノート『合同編集委員会議事録』【B371】が残されており、そのなかの「第1回合同編集委員会」の記録から各職場の新聞発行号数が確認できる。この2資料から作成した各支部での新聞発行状況は表2のとおりである。

表2から明らかのように、職場新聞の発行数は大垣、彦根、中津川支部が多い。このうち、コレクションに収められている職場新聞は21タイトルで、本部・大垣が各1タイトルあるのを除き、大部分は彦根支部のものである。ほとんどの創刊号を含み、新聞に掲載できなかった「らくがき」や投稿を文芸集にして刊行したもの、特集、アピールのために作られたものなど、定期刊行以外

(12) 「はじめに」に教文部長辻保治の署名がある。

(13) コーラスと詩朗読によって構成される発表形式は「シュプレヒコール」と呼ばれ、職場要求を他職場へ訴えていく際に使われた。本資料はその台本である。なお、製綿は臭いがひどいため他の労働者から忌避される職場であり、特殊手当の値上要求が出されていた。

のものも存在する。創刊は最も早くて1956年2月であり、ほとんどは1956年から1957年前半に集中している。また、定期刊行紙は、1958年2月に発行された『じんし』7号を除き、1957年中の発行号までしか存在していない。

ほとんどの職場新聞の前半面には職場・仕事への意見、具体的には組合支部要求に反映させる職

表2 近江絹糸で刊行されていた職場新聞の一覧

支部名	機関紙名	職場名	職場員数	発行部数	発行号数a	発行号数b
大 垣	スカッチ	合同混打綿	150	180	4	
	おりふ	合同織布	260	300	3	
	なかま	AB紡仕	470	520	3	
	わたぼこ	合同梳綿	180	200	4	
	てつくず	保全鉄工	20	250	1	
	しのまき	合同練粗	340	500	3	
中津川	いこい	A準仕	18	25	5	
	ほゝえみ	A織布	30	45	7	
	ホープの友	織布	24	70	1	
	友の光	合同精紡	105	120	2	
	ぼこぼこ	A精紡	49	60	4	
	らくがき	B連粗	30	40	2	
	シンプ	合同梳綿	35	50	2	
	しのまき	A連粗	36	50	3	
	混ちゃん	合同混打綿	35	60	3	
	つどい	紡績仕上	170	220	6	
彦 根	針の音	絹前C	88	250	1	4
	ボイラー かべしんぶん	汽罐部合同	21	1	1	
	ほのお	絹仕 ガス焼	50	150	11	*1
	ぼこぼこ	人精合同	300	450	6	9
	梳棉	人織梳棉合同	77	300	1	4
	晒練職場新聞	晒練合同	60	350	6	12
	ハイメン	排綿AB	62	200	4	3
	じんし	人織仕上合同	42	600	2	4
	ラップ	人織混打綿合同	70	250	2	5
	蛹粉の中で	合同製綿	160	250	9	13
岸和田		連粗				2
		準備	50			
	職場ニュース	織布	95		2	
富士宮		事務雑務	20			
	スピンドル	精紡A	90	130	4	
	ダルマ	仕上A二班	23			

注：原本では「合同」「A」「B」などの番別と職場名は二段書き表記となっている。*は絹仕（絹仕上）職場のもの。発行号数aは下記資料【B351】による。発行号数bは彦根支部の新聞のみの情報で、【B371】に記載のもの。彦根支部の連粗は【B371】にしか記載がない。

資料：『職場新聞代表者会議のまとめ』（1957.2.18開催）【B351】；『合同編集委員会議事録』【B371】より作成。

場固有の要求や職場内の仲間への意見がある。それらに対する回答や解決の方策が掲載されている場合もある。後半面には主に「らくがき」運動スタイルの雑感、詩、生活記録などがとりあげられている。

以上、本項では「らくがき」運動から職場闘争へと至る過程の資料を紹介した。これらの資料によって、労働運動における文化運動の位置づけの変化にくわえて、支部ごとの要求や労働者の性格の違い、さらには職場の実態にも接近できると考えられる。

3-2 労働組合内サークルの資料

コレクションには、近江絹糸労組全体のサークルにかんする資料も収められている。サークルの活動状況がまとまった資料としては、『教文部長会議資料サークル調査結果』（1956年）【B352】がある。この調査結果には彦根・長浜の両支部のものが含まれていないが、支部別にサークルの現状やサークル誌の発行状況、組合への要望などのアンケートがまとめられ、巻末には職場、組合役職、会社役職、寮号室、勤続年数、家の職業を含む各サークルのサークル員名簿が掲載されている。同資料から各支部のサークル活動状況を表にまとめたものが、表3と表4である。

サークル員名簿の各人の備考欄に「生け花」「洋裁」「和裁」などの注記があることから、話し合い・読書・コーラス・文芸・演劇など労働者が相互交流的に学び、自主的に表現する場を主にサークルとし、上述したような習い事に近いものは個人活動と認識されていたことがわかる⁽¹⁴⁾。なお、彦根支部でも55年6月頃には、読書会、詩サークル、音楽サークル、話し合いの会など約300人の労働者がサークル活動に参加していたとされている⁽¹⁵⁾。

サークル活動を労組教文部がどのように捉えていたのかについては、『第一回教文部長会議のまとめ』（1955年）【B341】、および『1956年度教文部長会議のまとめ』（1956年）【B350】が参考になる。サークル活動の活発化や、サークルの支援方法についての議論の過程が収められている。

コレクションには文芸サークルを中心としたサークル誌が収められている。彦根支部では、『ともしび』（読書会）【B227-229】、『波紋』（若葉会）【B230-235】⁽¹⁶⁾、『クルミ』（クルミ会）【B237】があり、その他、他支部のものも数点含まれる。これら支部単位のサークルとは別に、職場単位の文芸サークルなども多く存在し、サークル誌を出していた場合も少なくない。彦根の『ひのき』（製綿A文芸グループ）【B131-132】、『だるま詩集』（人織仕上ダルマグループ）【B155-156】などである。前述の『教文部長会議資料サークル調査結果』（1956年）【B352】とあわせ、これらを読み込むことで、ある程度サークルの運営実態に接近できるであろう。

コレクションにこうした資料が収められた背景として、辻氏が彦根の詩サークル『噴煙』を結成するなど、彦根支部の文化活動、特に文芸活動の指導的存在であったことがあげられる⁽¹⁷⁾。そ

(14) サークルは、「与えられた条件のなかで労働者の生活をうるおし豊かなものにするために自分の欲望を満し、となりの人と仲良しになるところだ」と定義されている。（『1956年度教文部長会議のまとめ』【B350】）。

(15) 藤島宇内「前進する近江絹糸一紡績女工の詩と生活一」（『婦人公論』40（8）、1955年8月、p.122）。

(16) 緑の会（若葉会）は『人生手帖』読者サークルとして全国各地につくられた。詳細は、天野『「つきあい」の戦後史』；寺島文夫「日本の文化運動における緑の会と「人生手帖」の意義について」『サークル運動—その理論と運営の実際』（文理書院、1956）参照。

(17) 『近江絹糸人権争議のオーラルヒストリー』、p.94。

れゆえ、次項で述べるように、コレクションには近江絹糸以外の労働者によって編まれた文芸誌が収められている。続いてその内容を紹介しよう。

3-3 地域サークル資料——特に『熔岩』について——

労働組合・地域サークルなど近江絹糸以外の主体が発行した（C）区分の資料の多くは、他の労

表3 近江絹糸労組内サークルの概要

支部名	サークル名	活動内容	サークル誌名	号数	会員数
大 垣	あけぼの座	演劇			31
	ブルーダイヤ	楽団			12
	どんぐり	コーラス			57
	むぎめし	学習	むぎめし	4号	30
	みずほ	演劇			36
	つぼみ	** [文学]			19余名
	湖城				11
中津川	読書会	読書		準備中	17
	コーラス	コーラス			52
	若草会	文学・学習	2回発行（1「手、思い出」 2「自由題」）		
	タンポポ会	人生手帖の会	1回発行（「私の母さん」）		29
津	オアシス	文学	オアシス、ほほづえ		12
	緑の会	話し合う会			
	演劇	演劇			34
	親和会	弁論			26
	ヒツジ会	話し合う会	ひつじの友	3号	10
岸和田	イナゴ	生活綴方	歌集「わたしたちのうた」		6
	めばえ	文学	めばえ	3号	9
	コーラス	コーラス			18
富士宮	綿ぼこり	文学	わたぼこり	4号	12
	波紋	* [社会問題勉強会]			9
	豆クラブ	カメラ			
	泉会	社研			12
	ポンチサークル	話し合う会		1号	
	演劇	演劇			11
	コーラス	コーラス			7
	美術	美術			6
若芽会				15	
東 京	労音	コンサートチケット斡旋			
	文芸サークル	文学			
大 阪	コーラス	コーラス			26
	ポーズ友の会	カメラ			20
	謡曲部・書道部				24

注：活動内容は資料から読み取った主な活動に基づいている（表4も同様）。号数は途絶したものを含む。*富士宮支部のサークル「波紋」については原資料に明確な定義がないため、補記した。**は不明だが、『らくがき帳運動について』で文学サークルとされているため、文学とした。

資料：『教文部長会議資料サークル調査結果』（1956年度）【B352】より作成。

表4 近江絹糸労組内サークル数

	文学・ 文芸	読書	話し合い ・社会研 究・学習	演劇	音楽・ コーラス	美術	カメラ	謡曲・ 書道	不明	合計
大 垣	1		1	2	2				1	7
中津川	1	1	1		1					4
津	1		3	1						5
岸和田	2				1					3
富士宮	1		3	1	1	1	1		1	9
東 京	1				1					2
大 阪					1		1	1		3
合 計	7	1	8	4	7	1	2	1	2	33

資料：表3に同じ。

働組合や労働者サークルが刊行した文芸誌である。1950年代のものでは呉羽紡績、愛知紡績など紡績関係が多いが、国鉄労組、名古屋市役所のものなども見られる。

地元彦根の地域サークル誌としては、『溶岩』【C418-425】、『城』【C430】、『詩集蛾』【C429】、『生活と文学』【C431】があげられる⁽¹⁸⁾。特に『溶岩』は全国的にも高い評価を受けていた地域文芸サークル誌であり⁽¹⁹⁾、詩作品だけでなく批評や詩と政治・運動とのかかわりを論じた原稿も多い。ここでは辻氏と近江絹糸労働者の両方にかかわりの深い『溶岩』について紹介する。

コレクション中に存在する『溶岩』は、10、11、15、17～19、23、33号の8冊である。ガリ刷で、表紙は多色刷、本文にも版画やカットが入っている。表紙やカットの制作者を記載した号もしていない号もあるが、記載名から同一人物が担当していたわけではなく、交代で行っていたようである。

「近江絹糸の詩サークルはどうして生まれたか」『詩運動』No.14（1955年）【C417】によれば、辻氏が『溶岩』に参加したのは、1954年2月頃とされている。辻氏のペンネームである「余子敏」の作品として、『溶岩』17号（1954年4月）【C421】、18号（1954年5月）【C422】、23号（1954年10月）【C424】に詩や俳句群が掲載されている。

次に、『溶岩』と近江絹糸労働者とのかかわりがうかがえる資料を紹介する。1954年6月10日付で出されたピラ「斗う友のために」【C426】は支援メッセージと詩5篇、呼びかけから成る。詩には、他社の紡績女工の労働詩などとともに「みなさん自身の仲間余子敏さんの詩」として「モグラもちの」が紹介されている。また、「斗いの詩をつくろう」という欄で詩の募集がなされている。詩による運動の方法論として、詩を読んでもらうのではなく詩を書かせることを指向していた溶岩詩人集団の意志が示されている。

詩作への呼びかけがなされた直後の『溶岩』19号（1954年6月30日）【C423】は、近江絹糸特

(18) 『城』は彦根市立病院内発行の療養者による文芸誌で、辻氏が中心となって入院中に療養者の詩や文を集めて発行したようである。

(19) 『溶岩』は、関根弘、大久保忠利、鶴見俊輔、安東次男「サークル詩の現状分析と批判」（『列島』4号、1953年3月）で「全国各地方のとくにその組織的な活動が顕著とおもわれるサークル」として他の12の詩誌とともに検討対象となっている。『列島』は当時の全国的な詩文学誌であった。

集号である。『熔岩』同人から近江絹糸労働者に呼びかける詩のほか、「近江絹糸新組合員」の記述のある者3名5篇の詩が掲載されている。また、本号には「近江絹糸の争議について」「熔岩詩人集団斗争日記」の記事が掲載され、「熔岩詩人集団」として近江絹糸の労働争議を支援していく態度が打ち出されている。

同年10月発行の『熔岩』23号には、編集部による「近江絹糸争議の批判と反省」が8頁にわたり掲載されている。本号発行前に、近江絹糸労組の大会で配布しようとした『熔岩』19号が焼却されるという事件がおこっており⁽²⁰⁾、関与を疑われた全織同盟への批判が前面に出た内容となっている。さらに、本号には「ふんえんぐるーぶ特集」として、近江絹糸彦根工場で辻氏を中心に結成された「噴煙」という詩グループによる『噴煙』の創刊を伝える記事とともに、10名13篇の詩と2名2篇の手記が掲載されている⁽²¹⁾。

コレクションには『熔岩』以外の作品集も収められている。たとえば、「暗い中に笑顔が」（1955年）【C427】は『熔岩』同人による共同詩集である。目次の詩タイトルのうち、8名15篇のものに鉛筆による○印が入っており、このうち6人が『熔岩』19号と23号で近江絹糸内の詩人ないしは噴煙グループ所属詩人として掲載されている氏名と一致すること、そして巻末索引の職業が紡績女工とあることから、これらは近江絹糸労働者の詩であると推測できる。

本稿の冒頭で述べたように、近年、労働者の文化集団・サークル活動にかんする研究が蓄積されている。「らくがき」運動の資料とともに、本資料もこうした研究の進展に貢献する資料だといえよう。

3-4 会社資料及び近江絹糸労働組合などの組織文書

コレクション中の労働組合資料は、辻氏個人の関心の範囲や人脈が反映されているため、不揃いであったり、テーマが文化教宣関係に偏っていたりするという特徴を持つ。機関会議資料や賃金・労働条件に関する資料はコレクション全体のなかに占める物理的な分量（書架延長メートル）の10分の1にも満たない。近江絹糸労組の大会議案書なども数年分は収集されているが、ここからその年度の活動全容を知ることはできない。そのような限界のある資料群ではあるが、ビラ1枚、メモ1枚に至るまで辻氏が大事に保存していたことは特筆に値する。

ここでは、これらのうち、文芸運動に直接関係のない労組発行の資料群を紹介する。その内訳は、近江絹糸労組の機関紙や大会等の機関会議資料が79点、冊子体の形をとっていないもの（ビラや会議配付資料などの1枚もの）が54点、そして大会などの会議で配布されたと思われる全織同盟発行の文書資料が10点である。人権争議、企業再建闘争、そして賃金闘争の討議経過が記されているが、所蔵時期が1954～62年と限られているという限界がある。労組発行資料としては、労働協約や組合同約、寮自治会規約といった「規約・規程」類⁽²²⁾や、『議事法』【B320】という実践的な手引書なども収められている。

(20) この事件については、上野（2009）、pp.313-314を参照。

(21) 「噴煙」成立時の様子については、余子敏・川本道成「近江絹糸の詩サークルはどうして生まれたか」『詩運動』No.14（1955年7・8月号）【C417】参照。残念ながら、コレクション中に『噴煙』の本誌は含まれていない。

(22) 寮自治会は正確には労働組合とは異なる。

数は18点と少ないが、会社の作成・発行物もコレクションに含まれている。たとえば、『家庭通信』【A5】は、会社が工員たちの親許に送ったものであるが、「給与明細書」のような個人情報、しかも辻氏本人のものではないものまで含まれる資料であり、当時の賃金水準や支払方法を知ることができる。今回は労組資料として分類したが、近江絹糸紡績『長野県人会名簿』【B101】という、ガリ版刷りの小冊子もある。

これらの資料を単体で分析することは難しいが、他の様々な労働史資料を組み合わせることで⁽²³⁾、当時の繊維産業の若い労働者たちの心性、その成長を、高度経済成長へと向かう時期の社会背景とともに分析することができるであろう。

おわりに

本稿では、辻コレクションの内容を紹介し、その労働史研究における価値を検討した。辻コレクションは辻氏が近江絹糸在籍時に収集した資料が中心であるという限界を有しているものの、資料を利用して、近江絹糸人権争議から組合分裂に至る時期を含む1950年代半ば以降の近江絹糸労働者の文化活動の実態、それらと職場闘争との関係、さらには労働者の心性の変化などの分析が可能であることを示した。

今後、辻コレクション、および我々が作成した近江絹糸オーラルが幅広い歴史学者に利用されることを期待したい。これらの資料を同時に読み解くことで、近江絹糸人権争議の新しい研究が可能になるであろう。むろん我々も、これらの資料を使った研究を進める予定であるが、資料の解読は様々な分野の歴史研究者の関心からなされるべきであろう。この文書資料を長く保存されていた辻氏、また資料保存にご協力いただいた関係者の方々の想いを引き継ぎ、研究成果という形で未来に「歴史」を残すことは、我々に課せられた使命であると考えている。

(しまにし・ともき 香川大学経済学部准教授)

(うめざき・おさむ 法政大学キャリアデザイン学部准教授)

(しもくぼ・けいこ 伊丹市職員)

(たにあい・かよこ エル・ライブラリー館長)

(なぐも・ちあき 東海学園大学経営学部准教授)

*本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））「戦後労働史におけるオーラルヒストリー・アーカイブ化の基礎的研究」（課題番号：23330115、研究代表者：梅崎修）の研究成果の一部である。

⁽²³⁾ 1950年代の繊維労働運動の実態を知る資料として、全織同盟史編集委員会編『全織同盟史』（全国繊維産業労働組合同盟、1962-）、大原社会問題研究所編『日本労働年鑑』（労働旬報社、各年）、労働省編『資料労働運動史』（労務行政研究所、各年）をはじめ、労働争議調査会編『繊維労働争議と組合運動』（戦後労働争議実態調査第1期第4巻）（中央公論社、1956）などがある。